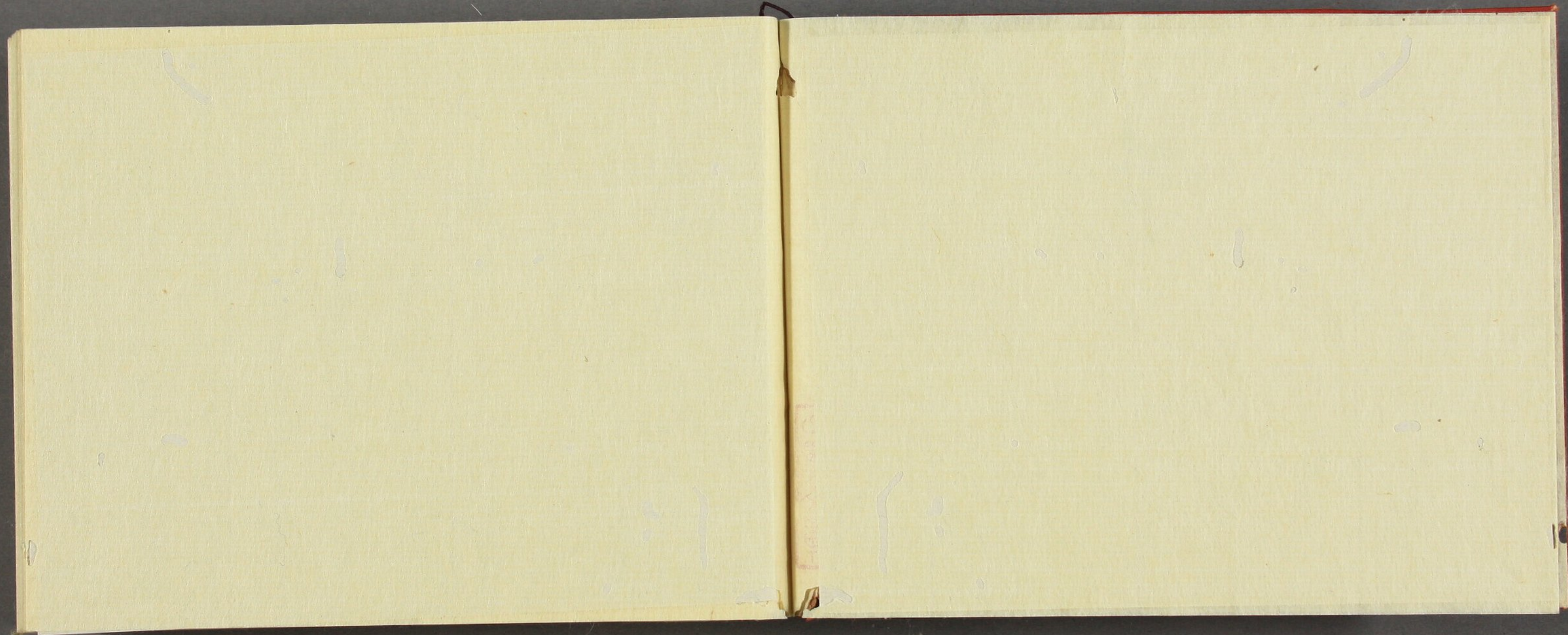




萃

卯曜文庫



若菜下

以卷上下より見るに作は同
也事おぼゆるより分
ても也但上は六条院の若下
ハ朱蔭院の若上下ともい
若菜の一本ともいふ心ある
中
源氏平家三月より以先
よりいふより平家より平
家平家の子の物語の上より
平見平家六七才なりハ又

とて

小幡提督の御書

とて

有る

とて

とて

とて

とて

院乃而也 大方に

是

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

とて

そのあつた乃其の 女之宮

乃あまのり也

殿との乃りゆい

中殿上乃りゆい二旨の例

とあれ。故後養の所の

所忌月よりなりて停じせし

れざるも、より忌月の名

に唐朝よりなりてはる御書

穆帝所を細しとて

九月九日これ忌月也といふ

あまのりゆい託し忌日七朝

ありて忌月よりなりて忌月

ありて忌月ありてなりて忌月

あり又唐武后乃其昇丹

武平て軍とてなりて其凱

旋乃其武后なりてなりて

なりて其武后なりて忌月なりて

なりて其武后なりて晋穆帝乃

例を引てつりて軍業と

なりて其武后なりて本朝

子以爲之是月以所爲之
之九月九日乃宴之樂
帝乃以忘月之樂之
十月子是行也
菊菓之
西宮抄殿上膳之
殿上分取方人
次仍改書押小曆四府中
點便不若爲出后所
設饗有禮之

適苑以金銀造物形爲
照物任人意有制之時
冠緋二具續巾足綾縠
一疋線二疋定陰陽師出
居早參內葺苗声解除
事書百夫作文主上御射
場射者著冠玉以依百疋
方人養前及養出居合
懸的矢取後射者
籌刺者冠百方頭皮

度數念人贈物互繼射
 勝方層舞勝方舞王鄉
 以下互繼射進錢出懸
 物上以台亦常書命前投
 所常的付座台的付碁
 侍座以射畢勝方底塞
 置札下或射畢有中科
 夾錢端的付台給
 人者懸物一評
 三月又三月三月三月
 母后為雲乃亦忘月也

此是延引而也

此是延引而也

的射也且中者中者也

右右大乃 右の舞是右

夕舞也

中女也

中女也

中女也

中女也

中女也

了歩射さうゆに騎射むさゆに

中人さうふ乃ん弓矢前投

也お子組に伏定らる也

久あよとらむる三月廿日

花乃けけりてさゆは

しものことまことさあめは

まともぬすさ花乃けけり

えんろろけりものとも

あろろいさろいさよりいさ

西宮抄進鉄道自殺倉院

出懸物 花人持出緒付定在

廿二日息下可被出女
蒙末延長四年中宮
被出女装束

柳のともと

史記曰楚有養由基者

善射者也柳葉百步而

射之百發而百中之左右

觀者數千人皆曰善射

とぬりとも 近患病人也

うけさうて 上多とも然

物と理運よめりあ

うじら也

あーん 巨に交也 大也

る也 舎人今も勝原に

てふ 子行月祥也 心

とま 也 也 也

の 一 句 ぬる 夕暮也

は ぬる 是く 心 也

夕暮 是く 是く 心 也

也 何 心 也 出 也 心 也 心 也

は 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

乃 道 也

物 何 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

心 也 心 也 心 也 心 也

ら也

うらたはなをいよ ああいひき
つれに内裏に猫の子乃ふ
よふれしてある也みる相本
のら也

六条院 是より相本調也
みぬぬらるる よふらぬ
まほよらうらまも也
ねこいふと 吾宮猫也
あまーぬらふらあり

あまーら 吾宮よふら子
入つぬらうらぬ也
まらつらたはらうらわ
明石舟御よりつら
ぬら宮へぬら物ある也
ふらぬらとあや
春らまらぬら子らぬら
尋ねらつぬらぬら
つらぬらも也
朱彦院れらうらぬ

柏木に朱唇花のうらみ

別しては花のうらみ也

花うらみの猫のうらみ

人のうらみ

誰とも知んぬ人のうらみの

松も昔の友あつたうらみに

ねとも知んぬ人のうらみ

乃歌也

けよあつて 喜文の詞也

これさうら 柏木乃詞也

酒さうらも 是さうら

猫もあつたうらみ

らんと 柏木乃うらみ也

さうらもあつたうらみ

柏木乃うらみ也

うらみもすむ

弄猫うらみすむ

む同ら

紙松猫乃うらみ

物是のうらみ

いふくやすむに似たり
るま

ねしと 猫ノ字ノ声
也ねし 立音通也ねし

なぐ聲也

^相まゝなる人のこと

字はまゝにさかちる人

一 弦弓の音也ん也

ねとちく 猫之玩あり

用く

ねむいよ 猫ノ聲

てりね也

こちら ねね也

ねぬとも 寝よ也

なまのちりとも 春也

ねは 猫の音也

せむ也

なちねのまゝに

この中より

なちねのまゝに

玉のこゝ也

右にわ 夕音也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也 玉ののこゝ也

玉ののこゝ也 玉ののこゝ也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也 玉ののこゝ也

玉ののこゝ也 玉ののこゝ也

玉ののこゝ也 玉ののこゝ也

事記すゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也

男子のこゝ也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也

玉ののこゝ也 玉ののこゝ也

ふらふらふらふらふら 或る

高は乃 持刀也

この能くその 凍長 致任

ふたふたふたふたふた

おねも 皆是也 持録の

下地也

ふらふらふらふら 高は乃

母ははれおろけふら

おね也

ふらふらふらふら 高は乃

ふらふらふらふら

おね也

昔ふらふら 高は乃

ふらふらふらふら

おね也

ふらふらふらふら

ふらふらふらふら

おね也

ふらふらふらふら

けふはな相也

如也

ちよひのうらみも ちよひのうらみ

ちよひのうらみも

ねむらうらみの中へ

と暮らさうと暮らさう

きやうしんがね

よりのうらみも

果とては成る

くしんがね

しんがね

きんがねの継子

きんがねのうらみ

きんがねのうらみ

きんがねのうらみ

あつちのうらみ

しんがねのうらみ

しんがね

あつちのうらみ

あつちのうらみ

あつちのうらみ

いふよしは せうりつては
有らむありては せうりつては
せうりつては

紙 せうりつては せうりつては

せうりつては せうりつては
せうりつては せうりつては
せうりつては せうりつては
せうりつては せうりつては
せうりつては せうりつては
せうりつては せうりつては
せうりつては せうりつては

いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては

用 せうりつては せうりつては

いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては
いふよしは せうりつては

可成りなほも昔よりいふ
とまればはあはれとあはれ
大北方に枝程もく昔より
乃とらふはあはれとあはれ
しとくもんすも也

みこころのいふ

大北方乃謂也田入事
とまらばはあはれとあはれ
しとくもんすも也
は謂ふにむと困る

了然と

高もさうもあはれ

昔よりいふも大北方
はあはれとあはれとあ
はれとあはれとあはれ
のすまひにあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれ

そすすうぬ

とらちうくてもういふ

まきりんれとれぬ

けふかて 源氏四十一

四十五まてのすいふらに

まふー 明人娘のむす

けふ子もあまのいふけ

あつらふけ中にまふ

十一年 清和天皇治十年

冷泉院の源氏廿八才乃は

受禪ありては豊年と

在位のもうあにらるる源

氏四十六才下りて十年也

つねの君 皇太子あり

さうら也

せらちうくてもういふ

冷泉院の源氏

りそらむらぬく 陽成院

依西頼脱履のるあま

おけらぬ

中
致仕之例ハ有也
進シモ左右乃大長致仕子
有也
二年四月三日是日大長致仕
致仕表從中督省善道
有勅后不許
王莽居攝子宇諫莽
而莽殺之逢萌謂友人
曰三綱絕矣不去禍將

及即解冠植東都城門
將家屬浮海客於遼東
陶洪景掛冠於武門上表
辭祿
左乃右乃子
關白二成子也
栗田關白道原 干母右乃
女御乃君は 兼香殿
女御也兼皇乃兄中
也
贈也

存生るるさねて人の事

何れ也

亦事大御乃 明石中宮

乃皇子也

右大御 夕音也任大納言

將任左大御也

冷泉院乃少らる 朱藤院

乃少らるる継ある事也

源氏に少らるる也

冷泉院とて少らるる也

毛より乞わりの事也

冷泉院とて少らるる也

然院とて少らるる也

火災ありて少らるる也

て火災ありて少らるる也

院とて少らるる也

少らるる冷泉院に大御山門南

二条小堀川西大宮東四町

累代後院也 諸漸天皇

御宇

おろしきとさるる也

朱藤院と源氏と云ふ事

相堂帝はあつて一と云ふ事

也

おろしきとさるる也

冷泉院と源氏と云ふ事

院の心位乃るおろしきとさるる也

おろしきとさるる也

おろしきとさるる也

一故に云ふ事と云ふ事

罪にくだるる也

弄冷泉院と云ふ事

始に源氏と云ふ事

事とある事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事

末の世と云ふ事

おろしきとさるる也

源氏と云ふ事

事と云ふ事

つれづれと云ふ事

孝の神の事とあるは
足しより姫子中宮の母の

事也

中宮 皇后院 先帝皇女 秋好中

宮 若坊山女 明石姫名 源氏の女

為言 秋好の姫を嫁え給

源氏よりあるはとも皇女

と云源氏より云と云也

唯今孫子の御孫といふを

はとも明石女御中一皇女子

秋好ら姫ゆつ子必定し

末乃る秋より

冷泉院の御 秋好中宮也

ゆつらうして 皇女子あり也

あはれなる理運しと云

ともあはれと云と源氏乃

たそらうと云と云うこと

しと云ふ事也

院乃こゝも 冷泉院也

いふ事との事と 女に云也

今上乃尔ふよをあらは

はらふいふいふい

海女と海女とた中

い海女と海女と

是と海女と中女也

此も物はさういけ

さういふと行ひ

し

こはよはさうと 吾

乃女御もも今は

みも此はくも也又

乃一分のふも榮

まんとふと行

と海女と 是と

まんとふと行

まんとふと行

あつたよとん 是

まんとふと行

まんとふと行

まんとふと行

うねとくろん 海女出

家出にしもも也

女御の君 明石女御の君

よき事母乃し〜〜

中くちさ記 明石上乃今

もそそ記えぬも行さ記

〜の〜まも也

あふま〜 明石上乃也

あ〜さ記 壽別傳多

〜の〜記〜

よ〜〜〜 あり

ま〜〜〜

す〜〜

^中長保五年九月九日御書

用白 干は 隨身室家奉

石清水并住吉給東遊

神樂亦有之

ひ〜 今より

新〜〜 也 源氏

ね〜

とては孝行

明石入道朝子毎歳七

神宗るる

けりるるるるるるるるるる

天下の母なる一は法

ありては此事とも也

所えくく 方あり也

信宗の事いれ 教あり

ありては信宗の納言あり

るるるるるるるるるる

あはれなるるるるるるる

しるるるるるるるるるる

乃るるるるるるるるるる

おほなる也

とては孝行

中 交野大領弥益女高藤

公息通生女子為兼香

殿女御生矢教帝

このとては 入る乃

なりては孝行

うはさむ 治磨りわ
明らなるすうたれと
目立つるしきとて
しき也

菅子よふ 二人の外いふ
借事也

まゐるいふすけとも

^中舞人八人石清水管絃の
臨時念のこゝろ 古忠新
まけとも也 陪従とも也

人とも十二人四位五位六位若
四人也これをもろくはこれ
さるるさるるなり
みくさるるなり 二人は加陪従
とも不見も兵部尉とも若
也 吾も念近東使乃何舞
人陪従いふまを忠兵衛人
也也 臨時念乃誠不烟事と
も兵部陣より是をとり
故に陪従いふりく無忠也

くろりしる 加隆後三橋家
詰り更をい出り也

内東宮院乃殿上人

内今上 赤二五 明石女御殿の二宮

院 冷魚

むろりしる 上人とあり

馬副 隨身 小舎人等

馬うし 侍の長ら事あり

小舎人 今ノ中百

分際乃果也

女御殿よりあり

明石女御 定上 同車也

つれ乃事本は

明石上 山乳母とあり

合より 寺のしる 屋敷と

と乃事也

ふりあの人とあり

後車と事 和 殿上人

乃車と借用らる 也殿上人

人此後より 出と殿出

東の國の人をよむ
之也

水あぐれ 水れ別乃る
花葉よこ地敷の草あれ
とららと 出車たも也
はるにあふきと 居るの
しらせう ぬくともま
あつゝのこ子細也
人あつて 居るを
よほしとらんとも也

大つたのこ子細也 けさ
やとらるるあつて
明らとさつたかぬくも也を
る事也 今と即位の
君服白皇子立太子居る
既老なるれとけな人
うくとおほく事と
是れはな居る人
してはらうぬくも
の日は乃早下のおも

七はしむるもくはく
ちるくふくはくはくはく
を也

早のあしむるもくはく
よつはくはくはくはく
のさくはくはくはく
さくはくはくはくはく
乃のさくはくはくはく
はくはくはくはくはく
はくはくはくはくはく

十月申乃十日 廿の也

能はくはくはく
子子振振はくはくはく
秋はくはくはくはくはく
おはくはくはくはく

おはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはく
昔のさくはくはくはく
さくはくはくはくはく
さくはく

一とくしんあまをくしんじやう
しんじやうふんをくしんじやう

一とくしんあまをくしんじやう
左鼓うらも也柏子ハ多柏子
也和琴ハ柏子とらあ
まをくしんあまをくしんじやう

ぬ也

山ありすれ竹のし
雪茂時念舞人竹文
青招袍蒲萄深下懸

地相袴

山あり東

遊乃装束也

かきしんあまをくしんじやう

これ東遊舞人陰従の

まをくしんあまをくしんじやう

けしんあまをくしんじやう 不別る

也或て文字清也別也

まをくしんあまをくしんじやう

まをくしんあまをくしんじやう

まをくしんあまをくしんじやう

中
東遊譜云先一二等以
河舞以求子加太子於
呂之襖子之聲雙襖也
長保五年任吉詣於御
社右厨以下上連戸之外
殿上人各十人舞之神也
立舞右厨脱衣被之
今業先ハ片舞ト云々
也神社祈幸ハ襖ヲ初詣
乃母求子ト云々故云云

十人ノ舞ハ舞ハ舞ハ
ノ舞ハ舞ハ舞ハ舞ハ
ノ舞ハ舞ハ舞ハ舞ハ
乃下ノ舞也急ノ舞ハ
殿上人乃下ノ舞ト云々也
紅ノ舞ハ乃舞ト云々也
ノ舞ハ乃舞ト云々也
ノ舞ハ乃舞ト云々也
ノ舞ハ乃舞ト云々也
ノ舞ハ乃舞ト云々也

宗一也 母也

一也折節也

水也也 子所食

と云う一人母也

一也

道也 折也

居也

二乃車に 母也

一也

一也

人

一也

一也

一也

一也

一也

一也

一也

一也

一也

面白くもなれりては
私年より何れに
幸ぬらば何れに
るも早かへりて
とていふ中
神身たるに
正しきまら
居るれは
又明ら上
也平たに

松乃

松乃

松乃

松乃

松乃

松乃

君耳唯圓堂上言

君眼不見門前事

白雲集

也

也

昔の山はあつたの

清梅 胡片 袋 ちり 子 文 海

つ子

なまら じ 龍 花 ら ぶ う む ら じ

い え の こ ぶ な ぶ り せ り

今 葉 以 文 海 子 じ ん の 文

根 ぶ ち り ち り ち り ち り

雪 を 諫 する 事 とも ち り 文

え ち り ち り ち り ち り ち り

あ の ち り ち り ち り ち り ち り

は ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

ち り ち り ち り ち り ち り

中務君 爲子の女房

とありこころゆきし

とありに神官也なるし

に此也神代約受の志す

とありといふ也前乃らる

うけりてあり

つれいさきしらす

弟子也也

いと見えしして 出さぬ

ねのふもをり

祝言乃神の事い松の

ちももはさるるの事な

と見えし也先又と

なり

急しすれうし

神事なるに勅旨あり

とありおのしに顔と

合て並居しと見え

おのしとありしと見え

見えしと見え

万歳くも 神亦有于歳

早秋

本方 ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

未方 まんさくまんさくまんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさく ちんさく

くちんさくちんさくちんさく

と也

ちんさくちんさくちんさく

四位五位六位袍也

あさくちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさくちんさく

ちんさくちんさく 神寶也

まゝに 直に あり

つゝ あり あり あり

あり あり あり あり

面白 あり あり あり

あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり あり あり

あり あり

女三宮也 今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

今乃三宮也

東宮の御女

明石女御殿也

御女也

のりたのりた 女御殿の

御女也

御女也

女御殿の

御女也

御女也

御女也

夕音明石女御殿也

子唯二人也

繁昌一也

右人女御殿也

まのりた

娘も女御殿也

石女御殿也

すくおほつた女御殿

ともおほつた女御殿

朱藤丸の御女

今はしほよまふく

御在世も種ありしに

ふをりり

わううも 女三宮と

水再会通し今生

乃由恨もあまふよと也

うらふやうに

朱蔭院より作らふも

こころたよりともけり

ふよまふもあまふ也

ついでさく 法おとさく

てはひもと源公おま

りうも也

こころとさうおま

今年朱蔭院乃四年

甲午九也其年五十一

孫也源公の甲午六也

まの葉あまふも也

水都也

西都がくはふもあま

こころを籠るはうと也
物も一あはれ物うと也
吾沖のゆうと也
もん籠る琴よあはれ也
大曲とものうまうとひけ
こころふらふ

琴の大曲也

うまうとあはれ也

^中樂書曰師文之妻易寒
暑殊登之感動以雷

琴書云師廣晉之樂
官也上於琴結易定暑
白凡雷為晉平公獻之
感玄鶴二八下舞

物一あはれ也 ぬいゆ也

あはれす。梅也をま也

みまうとあ 一宮二宮也

一宮一又懷妊也白也

アウとあはれ懷妊あるは

いづれにうら

三つと

ふくく 源氏出早下

乃朝也

いもつていふてい

随分身もあし中に

源氏のらよ及よめを

乃るゆいぢのちと也

又この比の人の 又南條の

是月あるもいふ正解

ちから事いすくろぬれ也

きんていなるしと

界は女三宮をいふと

るもちぬれ也

ニジウイナニ 七一二より 今年廿一

ちから一源氏いふて

は十四才もいふて

八年也

院もいふていふて

朱雀院へ女三宮乃ら

右對面なる也

けりしりりりりりりり

源氏なりりりりりりり

ハ叶もりりりりりりり

正月たるりりりりりりり

九のりりりりりりりりり

りりりりりりりりり

りりりりりりりりりりり

りりりりりりりりり

りりりりりりりりりりり

誠系

りりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりり

りりり

りりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりり

りりり

りりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりり

あつち子 定上乃とて也

赤色表衣 様汗衫

荷葉袖織物 表袴 浮紋

紅乃折しと單也

あつち子

正月まはる也 今通に

吾ま女御也 今と上乃

女御まはる也

あつち子 麴麩 表衣

蕨芳汗秋 表袴 麴麩

柏 山吹ノ唐袴 唐袴の山吹とて深なる也

おろしとてに 袴に出入

ともにおろしとて也

あつち子

紅梅表衣 様 表衣 二人

汗衫 青蕨之茶碗也

あつち子 装束はらうとて也

あつち子 赤も也とて也

あつち子 青丹 表衣 濃青

あつち子 青丹 表衣 濃青

たぢね乃らいし

夕音嬌男を并居の胎也

宮はくこくし

女三宮よと如比乃若信

にしよと月意ありて日

ころく信

よしそつらね也

ゆふのちをね 信也

いはしねに

よも也

女はえんりし

あし

是上女之言明る女御も

に御女乃中子也

いとむこくし

和歌の日本よりつらね

也古信より信ありし

るなれと物子命するに人

口よりつらね 古信

物字尋く

あしなごわらわらおちまひ

けりし帯互乃巻もい

たり

春のよむねは 春の能

ね古来不消る也

イ草ノ分其心分明也

一勅考の字書あやまり

んごあくすねと柏子

すこをくれあふんよこ

合くは物ちねは況女の

管絃折あももれいとい

海女乃恐怖ある也

花はこそのある香

花は梅ちるく一あすは

香はちるくあねい乃香

る

うらひもさき

死の香をいのちのよみ

あきさうふまふまらわ

何れにてもよす

源氏物語と藤下より

こころのゆき

こころのゆき

世経とていふ

をらひていふ

發給也言也

ふももーいやく

柱をこしとていふ

志願とていふ

源氏物語とていふ

源氏朝也いふ

乃とていふ

あつとていふ

位中とていふ

とていふ

たつとていふ

何れにてもよす

夕音朝也

たつとていふ

海女乃朝也

いづれなるのまじり

玉ころも海女の白髪か

あはれもあまのいづれ

りり

とあたまの 直衣

こころいふそつと

あたますこのあつと

あたまの 私 こと

とは向ひよりまよひ

あたまの神系はあ方

あたまの向ひはあ方

あたまのあたま

あたまのあたま

あたまのあたま

あたまのあたま

あたまのあたま

あたまのあたま

あたま

あたまのあたま

樂器乃しはこへしりたり
まゝなり也

うけりてはよきものなり
うけりてはよきものなり
うけりてはよきものなり
うけりてはよきものなり

は才より初めたり
也唯今絶古乃家中
るれは流通一なり
優なり也

りやうりては夕音相
子より唱乎志如是
すなり也

年よりあはれは
りやうりては夕音相
月よりあはれは
りやうりては夕音相
りやうりては夕音相

りやうりては夕音相
りやうりては夕音相
りやうりては夕音相

まはゆるいよむらじ

初拜日

夕音のわづらよむらじ

あはばあやあ夕音あ

らあやあよあの朝まこ

えさうり了為海女ん

キワラキ二月トシカ中乃十日さうり

了宮死盤空拂地縁

縁枝弱不勝雪白文集

紫花小女乃あさうこ

さうもわくあへるまふ

けく二月あさうれん

さうり柳乃さうりさうり

具平記雪の羽れさうりさうり

さうりさうりさうりさうり

あさうれさうりさうり

あさうれさうりさうりさうり

あさうれ

あさうれさうりさうり

懐姫乃柳也あさうれ

月さうりさうりさうり

けうきくいせいのみち

脚息に帝女をばと業
乃のさうまはあけつらに
こゆるも也 硯脚息に
必ら帝の命をさくる也
花といふさきよ

様よりてさる花を硯
あつてさまのあつてさ
まへ外にわさる也楊貴
妃と牡丹のさきよ

唐朝の花といふ皆牡
丹の也新朝の花とい
ふは桜也さきよ
しる花のさきよ也けり
物よのすまはさうまは
さきよのし 柳の細長
前黄小褂子唐物の裳
とさきよ

明石と唐物を引りけり
礼と花も也早下の花也

人への著し如き也
と云ふは

九情の濁りたる早下
をばよく人よある

まんと思ふに謙尊而光
早而不可踰上と云ふ

中なるもあや。正神も
あやる也是も早下也

五節は圓白の因を勅使
の首也其はともあや首三

不疑也

いふも

因乃とよしと云ふ

考へ地をいひ

此也乃と云ふ

男はと、膝のうへ

と云ふ事んす

と云ふ事んす

と云ふ事んす

たす身

さ日たのしむるは

袖にさくはるる花を

枝にさくはるる花を

きよのうらみ

さね乃心野分は

乃る也

さりくま 後言也

公やと死つるまは

公さるるの心は

こころさる 思ふ也

無^くあけぬ^くは^く女房を

とはす^くつ^くる^くも

し^くま^くら^く月 十九の月也

春宵一耐直千金 死有

清音月有陰 歌管樓臺

聲細く 鞞院落夜沉く

藤東坡

春乃おるる月よら

源氏の朝也 ^秘おけら月水

よとくく切つたて

よしのあけなみむすむす

あけなみむすむす

女感陽氣春思男感陰

氣秋思 毛詩

よしのあけなみむすむす

あけなみむすむす 源氏の

詞也春秋のさしむす

あけなみむすむす

春秋のさしむすむす

あけなみむすむす

あけなみむすむす

曲呂のさしむすむす

あけなみむすむす

中 平八律呂のさしむすむす

白也呂の陰助也然在律呂

系三の呂律のさしむすむす

次よすむす

日平八呂律を陰陽と用

東也唐三律呂と云陽

とすキニスル也

同云也乃一入二二乃也

ともハ一七律呂と云の也

よ云云調曲とも律呂系

乃も一の二七律呂と

律と云よと一七律呂

一劫律呂系二七律呂

つけゆり 同本調の伶倫

の也律も呂律を陽陰

と用事と律呂系と云

分ちるも一七律呂

律呂と云の陽と云

すも也文明唐子同云

上一劫一帖至若茶下

此也

今云所の秘調の呂と云

同云なり四ヶノ大曲ハ盤海

ノ律ニアル共秘ハ呂ノ物ニ

本ツキタレ

松四ヶノ又曲上ハ 皇帝

同乱旋 蕨合音万株系

ホシヨリハ 皇帝同乱旋

公臺哉烟呂也 蕨合万株

系ヲモクハシク 一ヨリハ

有ク人ナシ

いよハ今ハクハ

有織也ハ織乃人ノ身

知クハ也

うハハハハハ 人ヨリハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハ

あやしく人のさしあはれ
人乃ち字をもちて
すもよし物乃ちありて
かたからふるらそ乃ち前
とほいさきてみまへ内裏
乃ちもあつものも他あ
とまらちあつものも藝
総れあつてあつたあ
りていさきにえり
うねいしと今夜の女系

に勝負いふと浮は夕方
よのねの調也
うねいさん夕音とるね
やうく早やー 武野燗
てありけりも也
乃ちりてのよも
上代乃ちもあつたあ
と早下りての調也
のさしあはれ

無乃ち此巴拍本和琴今

くわいせいのしんをいふ
はなはなとて

いふはなはなとて
いふはなはなとて
いふはなはなとて

和界のしんをいふ
いふはなはなとて

寒暑をいふし折をいふ
て調ふをいふ也

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

いふはなはなとて

芭蕉の海舟中子
ねいよあ人のあつねに
又よまなま
ねいよあつねに

ねいよあつねに
一何也

ねいよあつねに
あつねにねいよあつねに
ういよあつねに
よあつねにねいよあつねに

ていよあつねに

よあつねに
ねいよあつねに

ねいよあつねに

ねいよあつねに

ねいよあつねに

ねいよあつねに

ねいよあつねに

ねいよあつねに

ねいよあつねに

んむいしと也

るれしとあはれ

あくもむる人今世の

あしと也

るるしとあしと也

昔のころしとあしと也

あしとあしとあしと也

とあしとあしとあしと也

あしとあしとあしと也

あしとあしとあしと也

了
白虎通曰琴者禁止於邪

氣以正人心也

文選注曰曠三養而神物

下降伊琴德之深哉琴賦

これこもいさ也

天地とあしと

中
樂書曰琴動天地感鬼神

よる川乃物のお

諸乃樂意琴のあしと也

とんたれ也

とんたれとんたれとんたれ

琴の地也

こはらまゝとんたれとんたれ

中 婆羅門僧正始後本朝

但先恭天皇文武天皇

弹琴始也

おほくはとんたれとんたれ

うのふれとんたれとんたれ

使乃は波斯國をたも

とんたれとんたれとんたれ

とんたれ

礼記樂記曰樂者天地之

和也礼者天地之序也和

故百物皆化序故郡物

皆別

漢書礼樂志曰象天地而

制礼亦所以通神明之

人倫

又曰孔子曰安上治民莫善

於祀移風易俗莫善於樂
大周二樂曰賀韜吳人也常
夜彈琴感鬼神見舞
教曲斯亦妙之至也

文選嘯賦

或云子安

曰發微

則冬熙蒸騁羽則嚴

霜夏凋動高則秋霜

春降養角則各風鳴

條

翰曰熙養也微夏音也故冬
發此聲感火災蒸至羽久音

也夏弱此聲感嚴霜至商秋
音也春動此聲則秋霖降角

春音也秋養此聲感溫風鳴
脩也谷風則春風也皆音律
至妙感應有如此者善曰列子
曰都師文學琴於師襄
師襄曰子之琴行如師文曰請
嘗試之於是當春而叩商
絃以召南呂涼風愜至草木
成實及秋而叩角絃以激爽
鐘溫風徐迴草木發榮當夏
而叩羽絃以召黃鐘霜雪交
下川池晷五及冬而叩徵絃
以激蕤賓陽光熾烈堅冰
五散師襄曰雖師曠之清角
鄰衍之吹律每以加之張湛曰
商金音屬秋南呂八月律角
木音屬春夾鐘二月律羽水
音屬冬黃鐘十月律徵火音
屬夏蕤賓五月律

至也故堯制神人暢

礼記曰及夫礼系之極于

天而蟠乎地行于陰陽

而通乎鬼神窮高極遠

而測深厚

礼と云ふ人なるも

琴弄大なるなる好よ

子事あるあり也

うらまひあり

心心あり物なる

かくと云ふる也

もらうに備とらう也

と云ふる也今に

うらまひあり物

ん也

あまのうらまひ

たるといふる

うらまひなる事

也

うらまひあり

曲也

あまのつらさなり

丁 日本見在書目六卷佐世集

樂家十三部音七卷琴經一卷蔡伯喈撰

樂品四卷 琴操三卷晉黃陵相撰

琴法一卷趙耶紫撰 琴錄一卷

琴德譜五卷 雜琴譜百七卷

琴用手法一卷 彈琴手法一卷

雅琴平勝法一卷 既感而卷

師とすんらんもろり

甲子のめらとひん

源氏より又はしるる

号人なることあり也

ちおけのり

夕音れお候をさる事と

なり

これこそさる乃西中に

ゆゑのりなる事

也春まのり是中れゆも

やうに生れぬ事也

今案以遊猛海調有先
縦七了勅其後者万煉
不説不實五ヶ洞中有
五六破亦若乎

^秘不知也云

發乃緒のりもろく

それも秘調なる

考秋より河の物

^弄しきぬよはよをさし

まろく調ふるをつ

ありしうりやよこ

これ君とら乃 二人ノ意

みよるぬ 耳乃を

也とぬいす

ほしと夜かけ

源也乃お

をいさう

所はあえ

右を正し

脈也

皇太子の御母也

大宮 故橋後小方也

の御祖母也

公もまた御母さなり御子

幼少より殿仕の可も此

より入さるるなり

と云ふ事あり

と云ふ事あり

此の御母さなり

東北對慈上の方也

うはまなり

慈上の女三宮なり

と云ふ事あり

給也

皇太子の御母 淳仁朝

也

と云ふ事あり 淳仁朝也

さう 淳仁朝也

と云ふ事あり

おのれをいふは かくもむかし
しるしを 琴の音にまかせ
しるしをいふは かくもむかし

此のまの内に 朱音記

も今も七女三宮よ琴
の音にまかせしるしを
らるるむかしは かくもむかし
むかしは かくもむかし
は かくもむかし
は かくもむかし

おのれをいふは かくもむかし
しるしを 琴の音にまかせ
しるしをいふは かくもむかし

此のまの内に 朱音記

も今も七女三宮よ琴
の音にまかせしるしを
らるるむかしは かくもむかし
むかしは かくもむかし

あ

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなる

減乃るもはるし

此

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

上よりたれども

福祿寿

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

長一はるも也

まはるにらひ 旅は
めそ外に物おもひさる
人はさしと

よはしきもの

まはるに海はるおしき
しあはるるまの
すくはるるまの
よよあはるるま
うはるる人なす
海はるあはるる

乃自祢也

こはるの 女三宮也海は
うはるるけりねるる
まはるるはるる
のまはるるまの
はるるるるる 物乃
まはるるるるる
よはるるるるる
まはるるる也

惣へんよはるるる

のりおひひら

あまのりひらひら

い

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あまのりひらひら

あま

うらみぬに 我れ人をも
くろくげり 胡女もむらじ
に成る人をも也

あまのつららなり 福子

海女のつららなり 福子
とまらぬ事もあると
くろく福子やんて
思ふも也すゝゝ 朝子
あまのつららなり 福子

あまのつららなり 福子

いとはら海女のつららなり
中うら海女のつららなり
我れにあら 是れは是
所の道理なり 福子
あまのつららなり

中宮のつらら 秋好冷泉

地つららなり 福子
あまのつららなり 福子
あまのつららなり 福子

皆源氏物語にあらば
とも也

か乃世あらば 今亦是
亦存せらるるも
一如く也

富も世にあらば
事よ若しはとも也
は物境のあらば
亦のあらば
も事よあらば

らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば

らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば
らるる人の世にあらば

おんこころをいふに
わがこころは

あはれに
あはれに

あはれに
あはれに

あはれに
あはれに

あはれに
あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

あはれに

しるしはふしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

おぼしめしとておぼしめし
おぼしめしとておぼしめし

立白波のたろりーあま
たのきと名ふるをさるる
つろよよるをいあうてふ物と
らた河に沖の燈あひまうふ
清あわつゝよる方もちり
人の思ひごとく 女の物
只ひの鏡如中つ也る方
よるなれぬ身そと也
あひねるをいぬ 連々胸
中よ只ひつむすわれば

好也

あやううこ 海女は女三度
乃方よあまをさるる方
まんと也

女御はあまの御衣をさるこ
女御よりはあまの御衣を
こあやうよるをさるる
とはあまの御衣をさるる
あまの御衣をさるる
海女はまんと也

むねつあねて 源也

あつーいあすま

廿七才なる也

あつあつあつ 源也の院

ーいあつあつ

あつあつあつあつ

あつあつあつ

あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

西遊記の事なり又
又より目録別より方
と書きせぬ也 又説書別
おもしろき事なり
此の事出たてぬ事なり
とも

まに物なる事 出
知りありん 余は
別々各別也 眼の前
よの事 持ちぬ事なり

えんりーの事也

むしり 源氏の自
よき事なり こと
と

たよりの事なり

おもしろき事なり
と書きせぬ事なり
と

白院の事なり こと
と

あしき事を引おこす
かきく

あしき事もおこす

女御懷姫也

あしき事もおこす 是上病中は

おのけあまのおそり

女御の折あまはまは

由系おこす女御中おこす

あしき事

あしき事 女一宮也

あしき事おこす 是上朝

あしき事おこす 是上朝也

あしき事おこす

あしき事おこす

あしき事おこす

帝範曰漁牛之罪不可死

以烹鵠捕鼠之狸不可

使之搏獸一釣之魚不能

容以注溝之流百石之車

不可端以斗筲之粟何

つとむい柏木は乃と也
三つわろしんを御しん
柏木乃とをりて也
むしよわ 柏木其詞也
命もつふりく
命も堪了ん也
院のうふま 此院は
朱蔭院也
おなりくい 命も人
乃らわとん也

いとおしん
いそりしん
と也柏木は也
おろしん
女二宮乃と也
才ろりしん
女三宮と各別のやうに
思ふなりしん
乃らわとん
乃らわとん

ふんがねんそと也

ふんがねんそと也

如三宮乃出うらうらに印

るふ米蔵院も今上は

志るしあも也

あふんそと也

ふんがねんそと也

ふんがねんそとの 今廿米蔵

院のふんがねんそと也

ふんがねんそと也

ふんがねんそと也

小侍候の朝也

ふんがねんそと也 根年乃若世

定りしふんがねんそと也

ふんがねんそと也

中細之昇々乃也

天武十四年二月十卯更改

爵位之号仍增加階級明

位二階淨位四階每階有大

廣并十二階以前諸王已上

之位正位四階直位勤位四
階務位追位四階進位四階
每階有大廣并四十八階以
前諸位之位是日草壁皇
子号授淨廣一位大津皇子
授淨大二位高市皇子授
淨廣二位川崎皇子思璧
皇子授淨大三位自此以下
諸王諸位未增加爵位
七月庚午初定明位以下

進位以上之朝服色淨位

已上並著朱ハナ華朱華此云

正位深紫直位淺紫勤

位深綠務位淺綠追位

深蒲萄進位淺蒲萄

文武天皇大齊元年始依

新令改制官名位号

又改制親王四品已上諸王

諸位一位者皆黑紫諸王

二位以下諸位三位以上者

皆赤紫直冠上四階深緋
下四階淺緋勤冠四階深綠
務冠四階淺綠追冠四階
深縹進冠四階淺縹皆添
冠綺帶白鞮黑革屨其
袴者直冠以上白縛口袴
勤冠以下者白腫裳授九
大帛正廣貳多治比真人
明正二位大納言正廣冬阿
倍胡卡也主人正從二位中納

言直大壹石上胡卡麻呂直
廣壹石系胡卡不比等正
正三位直大壹大伴宿禰
安麻呂直廣貳紀胡卡磨
正從三位又諸王十四人諸位
百五人改位号進爵各有

卷

柏木此右東門階中納言
任中納言正三位和南也
三位此袍乃色淺紫也

云也

昇
三位系續より三位あり

しるし

上古二位より三位に袍色

も階深あるん庭明以天曆

五年二月任持申納之叙従

三位元三木正四位下時九条右

大臣送袍中在後權系

おもひまわ君の家とぬまに

こ記定のしるしとてんしる

實房記にも叙三位番改

袍よりしるし

よつしるしとやまのしるし

小幡位よりしるし

いしるしより 柏木調也

いしるしより しるし

源氏よりしるし

いしるしより しるし

小幡位より調也

いしるしより 今世俗はら

ふしつふしつたて

そあまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あまふしつあまふしつ

あはれ也

ふらふらのぬの おやきん

とらふらふらのあはれ也

あはれもあはれもあはれも

くらふらふらふら也

かきもよせもあはれも 柏木朝

流女乃石有栲とみるも

あはれ也

あはれもあはれも 早下のら也

おあはれも 思惟もあはれ也

え也

えいもあはれも

辞遊仙屋

あはれもあはれも 小作は朝也

あはれもあはれも

あはれもあはれもあはれも

あはれ也

あはれもあはれも 柏木朝也

あはれもあはれもあはれ也

あはれもあはれも 柏木朝也

あはれ也

中へ思ひし事 柏木せう

お終ふらうんよと思ふ

四月十日 一いとおそろ

一いとおそろ 一いとおそろ

四月十日 一いとおそろ

毎年此後也 申午日也此

とあるに 一いとおそろ

らきききき 一いとおそろ

終ふらうんよと思ふ

お終ふらうんよと思ふ

らきききき 一いとおそろ

可いこと 一いとおそろ

梅桑君のおいひん也

一いとおそろ 一いとおそろ

弟子の地也 一いとおそろ

侍候の事 一いとおそろ

あはれも也 一いとおそろ

お終ふらうんよと思ふ

お終ふらうんよと思ふ

あはれも也 一いとおそろ

心中也

あつたよめ 一向の思ふ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

よめよめよめよめよめよめ

相本朝也

おまじりちまひ

おまじりけさあ

院も今は 女之宮の

ら申也

もの所は 相本朝也

おまじりも女之宮におの

まれおまじり也

おまじりちまひ 相本の

おまじりちまひ

んも也

おまじりちまひ 相本朝也

御者あはらぬおまじり

ら命はあはらぬ也

おまじりちまひ 女之宮の

あまじりちまひ 相本の

おまじりちまひ

くあはらぬあまじりも作

らあまじりちまひ

ら申也

あふむらさき後つり

猫の事也

よくほをぬくまへ

にくもを捨つていそつ

らねも也懐妊のそと

あふむらさきも也

秋のうららも 虫吟

ひりもふつと一は袖は

みかるといふもあふむらさき

おきつてむらさきもあふむらさき

おきつてむらさきもあふむらさき

と也結と頭を脱いでいり

くのよきいふもあふむらさき

もそふらつと也又正續

脱いは柏木れんもあふむらさき

うらむらさきもあふむらさき

よの分別もあふむらさき

袖もあふむらさきもあふむらさき

と也されもいふもあふむらさき

おきつてむらさきもあふむらさき

後川なるものなほ是もあらぬ
しほもさうしほ袖も何なり
只いせもさうれんかいたの
こらよさうめをさうなり
以外は教あかたあるく
不富よ及そ所る終

答用いづくは家のいづく
乃あまれもさうもさうの
文字ももさうめは袖也
としはいそいふもさうなり也

とらんもすらぬ

相まれば世人もさうなり也
宮もすらぬいさうなり也
てはすらぬいさうなり也

あまれもさうなり也
いさうなり也

向もさうなり也

いさうなり也
あまれもさうなり也
いさうなり也

大坂の元治の事

高橋宗子の子孫の事

て父孫は高橋宗子の事

の事也

みづの事

後継の事

の事

の事

の事

の事

是は別

の事

の事

の事

の事

の事

の事

の事

の事

の事

とていふ事ありては
ちかふ事ありては
ちかふ事ありては
下に好色ある人なり
とていふ事ありては
とていふ事ありては
物ありては
らんとていふ事ありては
らんとていふ事ありては
らんとていふ事ありては

是より病弱なりとていふ事ありては
久しかりては
是より病弱なりとていふ事ありては
久しかりては
ちかふ事ありては
ちかふ事ありては
ちかふ事ありては
ちかふ事ありては
ちかふ事ありては
ちかふ事ありては

ちぢ也

ふつらふ日 酒乃也

女宮をば おらと申也

くぬくそくしぬいぬい

摘み取るともよもよも

之宮乃るもよもよも

ゆもよもよもよもよも

海はゆもよもよもよも

きくもよもよもよも

あまのこも也

わらわらつおらと

わらわらつとに養ひに

ねもくつらう 又詭柱と

養とれに二と三と

ちとけ何もといはは

養柱にもつれと

よわ女に安とるも

いふ日一 東菴院の女

あはれも也

おらと申は

きんり

身に入初ぬより 是を死

入一のよと昔より也

きんり記つるより

不断乃護持僧夜摩を

とよきやぬの退出を

高合修法をともよりを

給ふる増も二部七退出

すり也

わろくともさく

もろくともさく

ふとくともさく

本誓者 正報者能延

六月住期不動義軌能延育

乃法もく秘法あり

善無畏三藏之師欲弟子

為受灌頂善无畏行

此法悉受灌頂也其後

於延年此より在之

とより初め終りもあぬ

源氏乃其よよふれは
しに神うも也

佛もみそりまらり

源氏に悲傷を伝てあり

好に好ありも也

人かこまきうね 他へは

まをきも也

しうしうきまらり

お乃まきと細しと

まをきも也

おほしうきまらり

はよまらりきん

まをきも也

さすよめらるは其の

命もまらりまた絶る

し

むしうきまらり

養ふのほろも也

まらねまのこはれ

し

又人のまじき

地人のまじき

い

ほろい

あ

我身

おのま

ま

あ

け

穉子

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

うらやま

きこはたけいばらりて

うとよよるもはるも病

者のいよこし

しよ

いばりて

よ

よ

え

え

つ

ゆ

さ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

おれも也

とりのくさ

聖武天皇

聖日也

さるは橋よ

向てとらふちんかたの

行を橋よとらふかた

もの出おかし 本意の

ふらふら

衛門督のふらふら

ふらふら

ふらふら

衛門督の車也

ふらふら

柏木のおら也

女三宮の正おら也

とらふら

むらうら

あつら

とらふら

うらふら

きくたこのの 栞本用字

乃詞也

青乃字も 是乃乃字也

いよこ 栞本の詞也

いよのこく 夕音乃詞也

いよあやーは 栞本用字

うらたの字は思ひよるんま

らしよ夕音は思ひよるんま

いよのこく 夕音乃詞也

いよのこく 夕音乃詞也

あいらし也

うらたの字は思ひよるんま

空子籠也 自由なるぬら

也こまのいんまのぬらぬ

あいらし 糸のしんまぬ

いよのこく

いよのこく 夕音乃詞也

思心乃字子地也

いよのこく 夕音乃詞也

いよのこく 夕音乃詞也

くいついそゆえ 是と獲

生一ゆえ也

う一人をふ 海の色也

亦是亦は現存の時人

氣のとうくきり

此師くてもあそりしち

事あらぬ也

いふもゆいへ 女の業障

了りし也

所有三千界 男子諸煩惱

合集為一人 女人为業障

女人地獄使 能断佛種子

外面似菩薩 内心如夜叉淫操經

抄出不不造之 可身考

海と空とむの物とては

るもよおれぬのいしれは

一よよらぬ是正其は

下よよらぬいしれは

おはしれ也

少くおろしんも 思ふ事

意とけしんおわし也

五のいもりや 五戒の優婆

塞優波夷乃戒也

いむよすしぬる いむす

八戒法也五戒新王經一日一

夜同持三歸五戒人生三

天中不守護又持五戒人

廿五神王被護

よまろくおきする人も

随分ハ強出も強弱も及

ふは六甲のちつし也

五月^{サツキ}あるもこれいふ

もは中日あるも乃祥也

もむらつし 品名示の

もろくしん 物も也

おまろくしんらくても

思ふの物よの物なり也

いふあるは物なり

ありあるすその物なり

源氏と柏木也

くさるやいささうは

女三宮乃柏木よしもと

初めの子懐妊あり

さくくろ宿世也

飛鳥はさきも

くろ懐妊さくくろ

くろ懐妊の院

七娘のあまきつり

女君ありくろおほ

てしつりぬぬ

女君は 是也

くろ 懐妊の院

くろ懐妊さくくろ

よ

あさきくろ

さくくろ

あさきくろ

さくくろ

あさきくろ

にねし病後なるはるる

とあるくは

とあるくは

二葉地也

あはれ今もは 是の

れはあはれ 深の朝は

病後なるはるる

す

はるす

私にはあり

はるす

はるす

はるす

はるす

はるす

と

はるす

はるす

はるす

はるす

家より御のしる也
きうしんじいのみせあり

各留半座系記葉を
とてま婦に蓮と
る也

そゆふしんか
女三宮(出)おのり
れ也

るかにおのりま
女三宮病也

おのりま 病
る

高はるるるるる
るるるるるるる
おのりまのりま
るるるるるるる
るるるるるるる

日るるるるるる
るるるるるるる
るるるるるるる
るるるるるるる
るるるるるるる

例はひさしなるぬ 懐妊の

よし 腹中也

あやしく短つて

短つて 女之宮乃 懐妊の

うらぬ 女之宮乃 懐妊の

みも也

短つて 女之宮乃 懐妊の

うらぬ 女之宮乃 懐妊の

事とも也

私久しく 懐妊の 女之宮

く短つて 女之宮乃 懐妊の

うらぬ 女之宮乃 懐妊の

事とも也

年ころ 女之宮乃 懐妊の

うらぬ 女之宮乃 懐妊の

く短つて 女之宮乃 懐妊の

うらぬ 女之宮乃 懐妊の

く短つて 女之宮乃 懐妊の

うらぬ 女之宮乃 懐妊の

く短つて 女之宮乃 懐妊の

いづれも女三宮あり
かしら也

信長よりいづれも

懐妊ありあり

いづれも源氏返答

乃辞あり

いづれも 柏木也

いづれもいづれも

いづれも居たり 對也

いづれもいづれも 人の

いづれも 柏木いづれも

いづれも

いづれもいづれも

源乃朝也

いづれもいづれも 柏木也

いづれもいづれも

いづれも女三宮あり

いづれも恨あり

いづれもいづれも

いづれも信用あり

何れもさるるに
いふ

昔あはれも

月もさるるに
女に宮乃

朝也

あよるるに
あ

うらちもさるるに
あ

あ

夕もさるるに
あ

あ

あ

夕もさるるに
あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

扇よのたに名もや

あまのこころに ことごとく

こころのこころに ことごとく

ことごとく ことごとく

ことごとく

よのこころに 蝙蝠乃

おとこころに 扇をこころに

や 故は扇は名もことごとく

今に末席也 極暑は扇也

ことごとく ことごとく

扇扇をこころに

扇をこころに ことごとく

扇をこころに

扇をこころに ことごとく

扇をこころに

扇をこころに ことごとく

扇をこころに ことごとく

扇をこころに

扇をこころに ことごとく

扇をこころに ことごとく

あれあゝあゝ 別々也

あゝあゝあゝ 柏木の色

あゝあゝあゝ 小結は、あゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

くくく

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

くくく

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

あはれなる人なり

朱菴院乃今上下く作
をなれ 故内より見え
廻あるべき也

うらららららららららららら

是上の調也外はあまなく
よらちも女に言ふるはら中
公くくくくくくくくくく

只んやうらららららららら

中 建勝也

我におおらららららららら

女三言にふくくくくくく

くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

のれんも 柏木也

つらつらるる心 柏木也

源氏れいおーる也

うしよりうららるる也

天眼乃る也 隠密す

し曰知るる 天地人神の田

ハなるる也

胡夕すこころ地なるる

不及引帯す

友乃も胡夕すこあら也

あゝ我々の心なるる

月と星の心 おそろく

うららるる也

もーるる 源氏れいお

切なりしきり源なるる

柏木乃公申也

か乃心なるる 心地なる

いはぬるる心 心なるる

と速速也

きんぐの心なるる

よきおとこ

おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ

おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ
おとこは、おとこの中なるおとこ

おとこは、おとこの中なるおとこ

くうーろりてん

柏木と女之宮とける也

か乃ゆんよまきり 照月夜也

つよよほりめと 出家也

いほるんも 以朝あめ

調よいあーらふれんどう

て中さち也

あふし世もふらふもはつち也

以照月夜片よちりけふ

を心源はよまきりよはまきく

ちーん也 秘身すかたの

ろしんもさるたかきね也

片を海人かーくーさ

かこす片乃浦さあり

きんかちる 海女と出家の

素懐あも也 ちりめくは

早いあつた也

あえろはらよーい 二座の

あうあぬえ廻向よ海女

を心源はらよまきり

如く也

そむかひをきくも

朱蔭院の山翁の母月

夜も早さねし徳長

乃さふさけおくるまふ

むらぶら 田中もりお

ふあはふらう 徳小通

如く也

満えりし 居すもま

艶まの 徳もりお

あふあふあふあふ

よ也

つおろし世もえ 勝月夜

乃返るの 朝朱蔭院

山翁也

あふあふあふあふ

只出るけふもさう

あふあふあふあふ

勝月夜乃返也

けふあふあふあふあふ

ゆきし地まらるるの我中人
唯ふくおんしるまに
る地好ましくれはる
とも也

息つこよハ 廻向文願心
此功德普及於一切我等
与衆生皆共成佛道
普及一切を好まふはき
ことより深し二三念
するともくもくもく此

ららよに我をも入信も以
あつと普及お一切を
より返看あら也而白
いましとあるとも
今此をらるる也
ふつこくし けりあり
也ましくんもあつと也
けよあつと也
いまのつこくもあつと
いふしかりと也

新院とてしる也。 横新院

出家乃事一こりて之

あつてはまよふ 新院は

貞女也らんあつては

るのしにあらはれ

院よりすしむるも

あつては

女子とてしる也

女子はそとてしる也

とては之をさるる中

ある故よさるるの故也

すゝを 宿因の親の心

すゝをあるるあつては

あつては

あつては

養育の親乃ちつては

あつては

よくこそ 源氏乃ち女子は

るは事とらつては

云ふは事とらつては

子もいふなり

とてあつてゐるに似たり

のまじりたる事なれども

きかす、今はよくいふ

くちをいふおれよ也

まうま 今上女二宮也

上乃養育也

伊下も 女御に似たり

またまうまおれよ也

かたもいふおれよ也

より早く一々年お子

に疎略よ是れ教養

もいふおれよ行と

おれよ一又いふおれ

人乃子も養育に今

も今いふおれよ

みこも 諸人おれよ

といふおれよ 別ら

と二人乃藤原に

よありきり也

よは乃とよま 独すこおん
もも字うろちて記るま
く真の字よそしりし
と也

能うありて 一人は
人子嫁しつうろなる
とふきとまてし事
也皇女のまてし事
れとれたる也
とありてまてし事と記す也

いふ人 存命いふ人
と尚侍斎院と記す也
ゆくとし記す也

またとらまぬ
初登心乃程まぬ也
六条東乃君 記す也
まてし事と記す也

法服といふもつと也
はくしお 金銀乃細工
す所也后の具は黒

澁白金物より藤繪子
わさとかさく 彼方よ
て用意するに旨しといふ
る也

かして山にまゝさくま
みさくまのさくま

山にまゝのさくま

是上病惱故朱薙院也

笑と定引也

八月ハツキは 養上恩月也

九月ナナツキは 朱薙院母胎也

月也

十月カシツキ 女三宮也

東門繪れ山あつりのま

女三宮也 高奈宮也

心乃君也 柏木東門繪也

まゐりちりて 女三宮也

地はをうも 源氏也

西山より 朱薙院也

月比く 女三宮と源也

乃中のる也

いゝるら 何とて後始る
うもむねつふれんおむす也
うれら 是と病氣平驗
乃ちらしむ後始る也
いゝるら 是はさう始る
事証うらうにちるあま
ふらららららららららら
殊畧ららららららららら
たはららら

らららららららららら

伊勢物語より日本紀凡

姿とむらむらむらむら

おれらららららららら

ひららららららららら

らららららららららら

才なる人なるもあき通

なるあららららららら

ららあらららららら

いゝらららららららら

思ふに 柏木はるるが
くわをきくしうのくうは
乃女之宮はあさあは
あさあはるる人あは
さうれはあはるる
と早あはと朱蔭院へ
ははあはるる
いあはるる
あはるる
ははるる

西公七

今より柏木はるる
あはるるのあはるる
と公のあはるる
いあはるる
あはるる
あはるる
あはるる
あはるる
あはるる

中し〜も也

ふら〜す〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

院此〜もく〜もく〜もく

朱菴院此在世乃百〇我

子志〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

給〜もく〜もく〜もく〜もく

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

い〜もく〜もく〜もく〜もく

公乃別也

ふら〜す〜もく〜もく〜もく

つ〜もく〜もく〜もく〜もく

宮中為りしとも也

公の御事 山崎の御事

も御事のほかにいふとも也

如之宮殿の御事とも也

御事御事也

り末にさういふとも也

御事御事也り末にさういふ

一に源の御事御事の御事

御事御事也 源の御事

御事の御事御事御事御事

もろともい 是の御事御事

もはともい 出家御事御事

御事御事御事御事御事

と御事 女之宮御事御事

御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事

乃御事御事御事御事御事

御事御事

御事御事御事御事御事御事

源の御事御事御事御事御事

よきしはかたもあはれ
むらゝくおまじにば
あはれいふまじ

は朝甲のうらまは
るるあはれあつた
きは梅さくらら
うきはあつた
あはれいふまじ
あはれいふまじ
あはれいふまじ
あはれいふまじ
あはれいふまじ

ともきひのいふまじ
教訓あつた

東門乃のいふまじ
すうあつた
みじよつげに柏あつた
あはれいふまじ
あはれいふまじ
あはれいふまじ
あはれいふまじ
あはれいふまじ
あはれいふまじ

大いび人の世間の人ば
相本に病なす也源氏よは
山遊ちあともるに比る道
とほふふ也

すはむに鞠乃母のねの
事也そまゆにけり何ぞ
そあんとは大将の忠
給へともあまありて
うれと源氏の強さるる
ねとあけいふ下よのねと

也

シハス トカカ
十二月 十より

えちつめえく 誠樂よよ

甲子六条院へふりね

このふらみ

自交也中三宮也

右大臣殿乃あか

玉のり也

てくくたかよ

一しあさむら

の御方の 記しる 思はるる
乃 試系に見物し 始るぬ
と也

東門階いりる 世より物ら

人なく 集るる 柏木に 爰

後に 逢ふ 志し 志し あり

一人を 集るる 志し 志し

一人に 不慮す 志し 志し

り あり也

とりわたり 別 けり

あり也

と あり 較 仕 大 長 也

例 け なる 志し 寢 殿 也 帝

志し 志し 志し 志し 志し

あり

志し 志し 志し 志し 志し

源 氏 は 藤 中 志し 志し あり

志し 志し 志し 志し 志し

志し 志し 志し 志し 志し

志し 志し 志し 志し 志し

はなはたしくめでたき事也

みこたらしき白き女よあは

つては子細あり侍はし人

も也

はなはたしく 女三宮子相本

も也

うねもこころ 源氏朝也

ふも乃病者 是と女三宮

も也

いふのゆみこの法

いふのゆみこの女三宮

也は事一由是に祈禱す

つぎに 此也

うとまらぬを 月迫也

えとめのももも 源氏也

あつちもちうりあも也

ふあはしきも 精進也

出出家もくまも也

家よあはつる 子孫也

あはれんもくまも也

又よふまゝに 誰にも相
子もこのまゝに合ふ
て病にうつるゝ也^其け
跡をうつり 迷悞をも
こゝろにうつり^也
正當に^也 源氏の^也
あつた^也 ちうく^也
その^也 ちうく^也
也
みさう^也 ちうく^也 みさう^也

すくなく病の想を^也 血氣
のこゝろに^也 病と^也
くち^也 脚氣^也 脚病^也
院の^也 中^也
人^也 乃^也
病は^也 乃^也
て^也 乃^也
とも^也 乃^也
解^也
車^也

古文孝經曰七十老致仕懸
其不仕之車置諸廟永
使監而則正而立身之
終其要然也

漢薛廣德為沛史大吏
凡十月免歸沛太守迎
之界上沛以為策懸

其安車傳

師古曰懸其錫
安車以策策致

仕懸車亦

古說也

つくふなり

致仕乃好い

よりあるなり也

下らざるなり也 相手を

下らざるなり也 深記志

深記志 深記志

と也 おなりなり日をも

如くするなり也

おもむくなり也 父古良の也

つりぬるなり也 子すけり

集ちるなり也

とはいふなり也 西賢なり也

いづれに記さしと待たけ
給ふは朱着地乃山浦定
りともあら海まとも也源
氏北早市て乃如ゆ人
返答ある也

らつりく 女二宮よわな
里ぬの宮と流江大長女
よもつりさし女三宮の
山宮あつふふ事なむりち
くくくくくく福ありと

本女抄の也

そくくくせん ちか抄に
省略ありては志と流江
やうと世宮にそそりていと
まはりてと源氏ゆくと指
本はらぬそ方可るに下我
まけと山宮らるる山物流江
然よりちまられといふく
みぬそそりちかやうに思
ひさしととも也

大おはあややけ 胡蝶春

ふたりの夕音は熱し

れども

もよおさるあやあん

志むにふたつあやあん

しんろあやあんの熱す

あやあんのまき

のあやあんのまき 朱音院也

たほあやあんのまき 朱音院世

とあやあんのまき 朱音院は

志おはあやあん

か乃大おと、夕音とあやあん

あやあんのまき

あやあんのまき

あやあんのまき

あやあんのまき

あやあんのまき

あやあんのまき

あやあん

あやあんのまき

五んうーむあー 記

乃こも

またく 物まをるんぬ

也業道よは深のぬ今

かうよふく連し人

そも也

乃こも 今日試示乃日

るれも女御女之宮は

なるとりれも見物をぬ

舞に装束もよくと

乃こも

あこも

赤白椽 葡萄漆

兼平三年陽成院七十

賀舞音立人眼赤白

椽 葡萄漆 下襲

けあはあといふ

青色 蕨芳重

仙遊殿 院よりぬる

はえ仙洞よりあり

太食調、樂也

壽のしきりちつく

才龍林

梅はまの白のあつくさひ

とる乃隣のちつ紀成なり

そちつ壽の隣はちつたれ

才垣よりそ紀はちつり

りふさぬのりまじ梅のさま

知しおつと折るさまはれ

或るさまのめ

底乃隣中より源氏おと

すくよ是上又或る乃梅

もろい居ぬ也

うれがよ下は上連中

大細さふ下也

西あつ 宴也

たれ大殿乃空らうも

梅思は宴食是玉うら

膳也

たねの三節三節

夕音子を井の膳也

吾乃之まはるんま

當昔乃之是也五世傳ては

孫王と云也

無束縛 或るまを是前

無束縛といひ一人の子

也無束縛明令の中絶を

たのおほいとの云々

玉の腹也

大お腹大らく 何おん腹也

らくそん 幼穉利也一人舞

或らくそんと云也

ふれんもくさ 幼穉な

と事ある一々吾物本

乃故んもあつた也

の中絶 皇慶年まゝに如

一原中絶乃子也

息いふれ

うらまひ物なれは御也

息いふれすはなれ

やういふれすはなれ

急いふはすまふはねり
東門塔のまじり 東門塔
却さうて乃ぬは甲ある也
海をくまへん
相本もやれ老るんと也
今よりけよ 別ヶ屋
相本証さうてくはぬ
相本のみよあはる也
ろく急いふまじり 源の解
くまへん海をくまへん

きりぬらうまじり
酒ももえぬのこぬまじり
らうまじり
あへんまじり
源氏もまじり
ぬぬ也
急いふはすまふはねり
今よりけよ 別ヶ屋
相本証さうてくはぬ
相本のみよあはる也

乃ある故也

わんしんといふくうがわ

病字興念一也

そのよひしーんかちんか

一糸言為糸まもま

もまは枝枝仕太長く柏木

をよしとりぬ也

女言れおや一也

為糸まも也は版柏木は

いほしんまもんかちんか

りうめちんしんかちん

今は別乃門出るなり

まもまも 為糸まも

一糸也是也

世のよひしーん 此是所乃

柏木よ乃ぬん調也

世言れまもい父母の白濁を

りか快乃病字なるも

はは夫婦の心をももて

まもれぬまもも常乃

さすまぬ也
とくもや 柏木乃ん也
とくもあめりけ
柏木返る也及之あめり
け 皇女びやうもれ
とくも也
なうく世よけり ちんけ
長久今一に官位もも
まきあめりけ ちんけ
の御もれんもあしと

存命不定さぬ柏木乃
深志ともえあつとくも也
とくもりてん ちんけ
い今生もはとくもりてん
命あつ 冥途も元初
わくも也 面白調也
ちんけもれんもあしと
何とて 柏木乃ん也
みさしちんけもれんもあしと
柏木乃んも也

又いひまゝなり也 一葉二葉
所乃の好なりと云ふなり
よよ又これに云ふなり
人より云ふなり
相方の婿男也 小方は養
子也

いまも 為菜子ハヤキ
多 朝也 今は云ふなり
れ 一ハ思ひてあるなり
出ありてんは云ふなり

あはしくあるかろなり

随タユ 史記 乃 踏 櫛

なるなり也 一ハ云ふなり
實は云ふなり

為菜子也

なるなり也 一ハ云ふなり

宗親也 佐理病 櫻の

なり 一ハ云ふなり

なり 一ハ云ふなり

なり 一ハ云ふなり

栴子には毒ありといふ

内よりし院よりし

今上東宮院也く山念

比るるらけいよく

早ぬ也

六条院より 天下は英才

まぬも天下は為おくお

と心懸情也

大ぬいまり 夕音に和

と別くくし中なるぬ也

御覧に廿五日

ニシラニチ

東宮山院

十二月廿五日也あふりぬ

あふりのしとさる

いくあらぬ也

わいもるに上座

一河に致仕大臣に慈願の母

分るるかあるふのふ

あふの母に同控あふる

事なるぬもいふおの

走引——さるるる年内

吾余日と也

いそそお新しとゆん

次よお新しとあはれ也

女官乃少心のうら

柏木の事ん

建いの五十寺

五十七寺也年乃教也

おとつとつとつち 仁和也

ゆらゆらとつち

天慶二年十一月貞信云六

十賢大改大長於六十寺

修観彌

永延二年三月十日法興院

大入道六十賢之家今日修

観彌於六十寺

今案此院の事諸寺し観

彌の事諸乃教と用と定

けりる也五十七乃此院をれ

ハ五十七寺なり此院修あり

也乃おとつとつとつち

仁和寺圓考を奉考金剛
界大日如来を以て五
十有二の編經別してハ
又仁和寺田考を以て摩
訶毘盧舍那乃の編
經あり也此結語の事
ハ奇物也此の編經を
ちよも下りしるまの由
此法ありといふ事いと
くく記さる也此の由

第法莊子なるもの事
相似する也

